

## 秋永一枝著『東京弁アクセントの変容』

佐藤 亮 一

本書は、著者の言語研究のうち、主として東京アクセントに関する論文を集成したもので、全一〇章から成っている。以下、各章ごとに概要を記し、評者のコメントを述べよう。

第一章「アクセント推移の要因について」は、都区内および周辺地域を対象に実地調査を行い、東京アクセントの推移の状況を把握し、アクセント推移の要因について考察したものである。

著者は冒頭で、アクセント型を決定する要因について仮説を立てている。それによれば、アクセントは「時」「場」「語彙」「発音者」の四つの基本的な要因により決定され、それぞれの要因は他の要因と相互に結び付いて具体的な要因を形成する。たとえば「時」と「場」が結ばれれば地域の変動など、「時」と「語彙」では語彙の新旧など、「時」と「人」では年齢、「場」と「語彙」では日常語か否かなど、「場」と「人」では生育地など、「人」と「語彙」ではその人の語彙の頻度などがアクセント型を決定する要因となる。この理論的枠組みはアクセント変化の要因を考える際のポイントを研究者に示唆するものである。これまでの研究者の多くは、これらの枠組みのごく一部（たとえば年齢差や時代差など）にしか眼を向けていないのではないだろうか。

調査結果の分析に関して、日常使用頻度の少ない不安定な型は安定型（大勢力型）に変化しやすいという指摘は、言葉の馴染み度とアクセント型との関係を早くから指摘したものとして注目される。また、都区内における地域性（山の手と下町の対立など）が背後のより広い地域を考慮すべきだという指摘も、今後の研究の課題を示唆するものとして興味深い。地域性に関しては、旧型が旧市内や下町に残りやすいこと、それが地域の生活習慣にも起因することを指摘している。また、個人の性格とアクセント型との関連についての指摘（二三ページ）も、言語の社会言語学的研究に関する今後の課題を示唆するものである。

第二章「アクセントから文法へ」は東京アクセントの形態論的な法則を文法と関連させて論じたものである。具体的には、①数詞、固有名詞はアクセント体系の上からは名詞の範疇から除くべきこと、②数・時・量をあらわす名詞・数詞はアクセントの上からも副詞的用法を持つこと、③代名詞・数詞・連体詞・副詞の一部はアクセントの上からは疑問詞・指示詞としてまとめる方がすっきりすること、④擬声語・擬態語もアクセント論の上からはまとめて扱うべきこと、⑤動詞の中止形と転成名詞はアクセント型により区別されること、⑥複合語の後部要素が名詞であるか接尾辞であるかもアクセント型によって判定できること、などを指摘している。

これらは東京アクセントについて記述したものであるが、各地の方言アクセントについてはどうであろうか。この方面の記述は研究が少ないだけに、今後の発展が期待される分野と言えよう。

第三章「江戸アクセントから東京アクセントへ」は、『日本大辞書』（山田美妙）や、昭和二八年―三〇年に高年層を対象に著者が行った調査、レコードなどによるかぶき俳優・落語家のアクセントなどから、幕末―明治初期の江戸アクセントを推定し、現代の東京アクセントとの違いを考察したもの。「母音の無声化によるアクセントのずれ」「感情のこもった接頭語のつく語の頭高型」「語末に濁のある名詞」が今よりも多かったことを指摘している。この中で、現代では無声化の度合がやや弱くなり、アクセントがずれない傾向があるという指摘（三七ページ）は面白い。これは一九六七（昭和四二年）の論文であるが、音声分析機器の発達した今日では、無声化に関する実証的な検証が可能であろう。

本論の末尾で著者は、頭高型、尾高型、接合型（前部成素のアクセント型を生かす型）がこの百年で急速に減ってしまったことを憂い、「今後国家で標準アクセントを選定するような折は、百年後、二百年後のこともじゅうぶんに考慮に入れて決めてもらいたいと思う」（五〇ページ）と述べている。これは、東京アクセントの体系が単純化し、同音語が増えることは好ましくないという立場からの発言である。アクセント教育、アクセント政策に対する著者の発言として注目される。

第四章「アクセントのゆれと今後の動向」では、東京方言の話し手が郊外に離散し、同一方言話者の会話の場がなくなったこと、若年層が親と会話する時間よりテレビ・ラジオに接する時間のほうが長くなったこと、かつての日本の家庭教育にみられた言葉のしつけが行われなくなったことなどの社会的背景により、伝統的な

東京アクセントが失われていく様相が具体例によって示されている。著者のため息が聞こえてきそうな内容である。この中で、東京アクセントの変化が地方に及ぶ例が若干あげられているが、『東京語アクセント資料』などにより都区内におけるアクセント変化の実態が明らかにされつつある今日、その影響が地方にどのようなに及ぶかについては、今後の調査研究の課題の一つと言えよう。

第五章「言葉の馴染み度と発音・アクセント」は一九八九年―九〇年に二五〇項目について行った言葉の馴染み度調査（および追加調査）の結果を引用しつつ、地名の清濁やアクセントについて、地域差や男女差の観点を含めて考察したもの。馴染み度が高い語ほど伝統的な東京方言の音声・アクセントが保持されていることを実証している。伝統的な地名や寺社名に地域差が現れやすいが、これは地理的にその名称の地に近いかどうかだけではなく、その名称が現れる芝居や寄席などの世界に馴染みが深いかどうかという生活形態とも関係があるという。男女差に関しては「枉（おくみ）」「緋縮緬（ひぢりめん）」などの服飾用語に関して、女性の方が伝統的なアクセントを保持していることを指摘している。なお、駅名の「高田馬場」について、著者は、下町生まれの高年層二〇名の調査結果をもとに「駅名が「たかだのばば」であるのに、ダと発音したのは一名のみである。（たかだのばば）」という駅名表示は」今回の調査でも多くの人がおかしいと指摘していたもので、駅名の変更こそ望ましい」（六九ページ）と述べている。ここに高年層の（伝統的な）東京方言話者の言葉を標準とすべき

であるとする著者の立場が明確に現れている。

第六章「東京弁アクセントから首都圏アクセントへ」では、伝統的な東京弁アクセントが破壊され、首都圏アクセント（東京共通語アクセント）に変化していく姿を具体例をあげて示している。著者は本論の末尾で「東京弁から東京共通語・首都圏語への変化をたどることは時間の問題である」とし、「長らく言語の島であった東京弁の終焉を記す作業」を行いたいと述べている。

第七章「東京・芦安両アクセントにみる接合型の衰退」では、東京弁と芦安弁（山梨県中巨摩郡芦安村）における複合語のアクセントについて、芦安弁の方が接合型の残存度が高いことを報告している。この中で、読み上げ式では新型（結合型）が出やすく、方言談話では旧型（接合型）が現れやすいという指摘があり、近年における方言アクセント調査の問題点が感じられる。「現在の東京共通語は平板型と結合中高型があまりに多く（中略）、東京弁話者からみるとリズム感に乏しく切れ味も悪い。テレビから流れる若者（向け）番組は、高年者にとってメリハリがなく騒がしいばかりに聞こえる」という著者の感慨も興味深い。

第八章「字音一字語のアクセント」は、おもに「気（き）」と「気（け）」のアクセントの対立について、慣用句や複合語の用例を集めて記述したもの。一拍語の頭高化が進む中で、慣用句の中では伝統的な型（平板型）が保たれるという指摘が目される。

第九章「アクセント核の移りと聞こえの方言差」では、「汽車」「吹く」のような母音の無声化を含む単語に関して、聴取者が自分のアクセント体系に引きつけて聴く現象について、具体的な記

述（アクセント表示）の方法を提案している。アクセントや音声の調査では聴き取りに迷いが生じるケースがしばしばあるが、この場合に断定を避け、両形（型）の（あるいは中間的な）表示を行うことには評者も賛成である。

第一〇章「東京弁音声の衰退」では、方言音声調査法の問題点が指摘されており、冒頭で国立国語研究所の「方言文法全国地図」の内容が批判されている。方言と共通語の使い分けが高年層を含めて当り前になった今日、方言音声をどのような方法で把握すべきかについては、評者にもいささか考えるところがある。少なくとも、これまでの音声調査で採られてきた、いわゆる「なぞなぞ式」調査法は通用しにくくなっていると思う。

以上、章ごとに紹介とコメントを記した。なお、巻末に「付録」として著者が昭和二八―三〇年に行った「東京アクセント第一次調査報告」の詳細なデータが収録されている。

本書は東京アクセントの変容を言語学者の目で精緻に、かつ多角的に分析したものであり、東京アクセントや東京弁に限らず、各地のアクセントや方言全般を社会言語学的に研究しようとする者にとっても、良き指針となるものであろう。しかし、同時に、本書には、伝統的な東京弁の衰退を惜しむ気持ちが随所に表れており、下町に生まれ育った著者の、東京弁とその背後にある東京庶民の生活に対する愛情が流れている。そのことが本書を単なる研究書ではない、著者の主張のある「作品」とさせている。